

総説

高齢者ケアにおける文化看護

呉地祥友里¹ 大湾明美² 田場由紀² 大川嶺子² 山口初代² 佐久川政吉²

【目的】「高齢者は地域文化を生きている」という立場で、文化に関する文献検討により高齢者ケアにおける文化看護の現状を明らかにする。そのために、文化という概念を概観し、わが国の看護における文化の捉え方を整理したうえで、高齢者ケアにおいて文化看護がどのように教育研究されているかを検討する。

【方法】文化人類学等の論述文献、看護基礎教育のテキスト（2006年～2013年）、文化看護学会誌（2009年～2013年）、国内外文献（1989年～2013年）の中から、そのタイトルまたは抄録に「文化」、「看護」、「高齢者」、「cultural」、「nursing」、「elderly」のキーワードのある文献を抽出し、整理分類した。

【結果】文化という概念は、人間理解をめざす学問領域で多様性を持ち、人間を対象とする看護学領域でも国内外で取り入れられていた。わが国の看護における文化の記述のあった看護学のテキストは13冊で、自文化や高齢者の持つ文化を意識する必要性、グローバルとローカルな健康問題への取り組みの必要性等があった。文化の研究を蓄積している文化看護学会誌の21文献は、外国の文化と日本の文化に関するものであった。その日本の文化の捉え方は、「個人の生活体験による認識と意味」、「家族の生活体験による認識と意味」、「地域の特徴による人とのつながり」、「歴史の生活への影響」、「看護職が異なる地域文化にふれる体験」、「組織の特徴による人とのつながり」の6項目に分類できた。国内外の高齢者ケアにおける文化看護の研究は、国内61文献では「地域の持つ文化」、「文化の比較」に関するもの、国外85文献では「移民の文化」に関するものが多くみられた。

【考察】文化看護の教育には、異文化理解のために自文化を意識する必要性、個々の高齢者の持つ文化という虫の目（ローカルな視点）と老いのもたらす文化という鳥の目（グローバルな視点）の必要性が示唆される。高齢者ケアにおける文化看護の研究では、国内外でその差異を生じさせているのは自己観と考えられ、自己観が研究の関心テーマや何を研究の対象とするかに影響していると考えられる。

キーワード：文化看護 地域文化 高齢者ケア

I. はじめに

高齢者が急増する中、社会保障制度改革推進法により、相互扶助体系をバランスよく組み立て、それぞれの地域に見合った地域包括ケアシステム構築が急がれている（厚生労働省，2013）。それに伴い高齢者ケアも、住み慣れた地域で馴染みの関係の中で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができる支援が必要である。松林（2007）は「老化の多様性における個人差について生涯をすごした自然環境や文化背景の影響を考慮する必要がある。」と、対象理解のために文化背景を考慮する必要性を述べている。

また、下地（2007）は離島の高齢者が慣れた地域に住み続けること、伝統行事に参加すること、方言を話すことという地域文化行動は、健康感と幸福感に影響していると述べている。これらのことから、「高齢者は地域文化を生きている」とし、高齢者ケアを捉えなおす必要があると考える。

看護において文化が取り扱われたのは、アメリカで1990年代に文化人類学の視点から看護を捉えたレイニンガー（M. M. Leininger, 1995）による。レイニンガーは、文化的背景がケアに影響するとし、サンライズモデルを提唱し、「文化ケア（Culture care）」理論を構築した。わが国の看護における文化は、千葉大学の21世紀COEプログラム（千葉大学大学院看護学研究科、

¹ 沖縄県立看護大学大学院博士後期課程

² 沖縄県立看護大学

2008)、日本文化型看護学の創出・国際発信拠点－実践知に基づく看護学の確立と展開－で組織的に検討された。そのほぼ同時期に、「世界の各地に生きる人々がもつ文化の多様性、普遍性を探求し、それらに反映した看護方法を研究開発し、看護学の発展に寄与すること」を目的として文化看護学会（2007）が設立された。野口ら（2011）は、「文化に根ざした保健看護の取り組みは、実際は地域ケアの実践である」と述べ、地域ケアとは「ケアを地域で実践するのではなく、地域によるケア」とし、地域文化を基盤にそこで暮らす人々とともにケアを創ることを強調している。しかし、地域文化を取り入れた文化看護の体系化は緒についたばかりで、高齢者ケアにおいてもその教育や研究は散在し、高齢者ケアにおける文化看護の現状を整理する必要があると考える。

そこで、本稿では「高齢者は地域文化を生きている」という視点から、文化に関する文献検討により高齢者ケアにおける文化看護の現状を整理する。そのために、文化という概念を概観し、わが国の看護における文化の捉え方を整理したうえで、高齢者ケアにおいて文化看護がどのように教育研究されているかを検討する。

II. 研究方法

1. 文化という概念の概観

文化人類学、文化社会学、文化心理学のそれぞれの分野の研究者による文化についての論述を文献で整理した。

2. わが国の看護における文化の捉え方

看護学のテキストと文化看護学会誌から文化の捉え方（文化看護）を把握した。看護のテキストにみる文化看護については、看護基礎教育で「文化看護」について記述されているテキスト名とその内容に関する文献が2005年まで検討され整理されていた（佐藤ら、2005）。その文献

検討の継続として、2006年から2013年までの看護基礎教育における看護のテキストで文化がどのように扱われているか検討した。用いたテキストは、先行研究（佐藤ら、2005）で文化看護の記述内容が掲載されていた基礎看護領域、地域看護領域（家族看護、在宅看護を含む）に老年看護領域を加えた。検討テキストは75冊中、目次か索引に文化のキーワードが含まれている13冊を分析対象とした。看護領域別で文化の記載があったものは、基礎看護領域は3冊、地域看護領域は8冊、老年看護領域は2冊であった。分類は文化についての記述部分を段落で抜き出し、その記述内容を佐藤らの項目に照らして分類した。

文化看護学会誌にみる文化看護については、文化看護学会が発行している全ての学会誌である第1巻～第5巻（2009～2013年）を用いた。対象文献は、総説、原著、報告、資料であり、寄稿論文や学会活動の報告等は除外し21件に絞り込み、文化の捉え方に関する記述を要約し、内容ごとに文化の捉え方を分類した。

3. 高齢者ケアにおける文化看護の研究

国内文献の抽出は、国内の医学・看護学関係文献を網羅的に収録している医学中央雑誌web版を用い、1989年～2013年を検索対象とした。キーワードは「文化」、「看護」、「高齢者」とし、「文化」×「看護」×「高齢者」で398件であった。さらに「原著」と「総説」を抽出し174件に絞り込んだ。絞り込んだ後、論文名、キーワード、要旨のどちらにも「文化」の文字が記されていないもの、及び固有名詞（大学名）や行事（文化祭）などは除外し、分析対象を61件とした。分類は、先に文化看護学会誌の掲載文献を、研究目的、対象、方法から、研究メンバー間で帰納的な分析をくり返し、高齢者ケアにおける文化看護について「個人の持つ文化」、「家族の持つ文化」、「地域の持つ文化」、「移民の文化」、

「組織・専門職文化」、「文化の比較」、「文化の教育研究方法」の7つのカテゴリーに統合した。

国外文献の抽出は、看護とそれに関連する医療分野の文献を収録しているCINAHLを用い1981年以降を検索対象とした。キーワードは「cultural」、「nursing」、「elderly」とし、「cultural」×「nursing」×「elderly」で25件、abstract検索で12件に絞り込んだ。同様に「local」×「cultural」×「elderly」のabstract検索は7件、「cultural care」×「nursing」×「elderly」のabstract検索は10件であった。また、PubMedを用いて「cultural care」×「nursing」×「elderly」のabstractのあった61件を加えた。絞り込んだ文献に重複はなく、abstractを読み内容が高齢者と関連性がない5件を除外し、検討文献は85件とし、国内文献と同様に分類した。

Ⅲ. 結果

1. 文化という概念の概観

文化は、cultureの訳語であり、原義は「耕作」である。古在 (2009) は、cultureの多様な複合語から、日本語では、文化以外に耕、作、業、芸、養、殖、産、育、栽、培、飼の意味があり、「文化は、生態系の一員としての人間の創造行

為により生まれる」と述べている。このように、文化は人間と環境との相互作用の産物であり、人間の日常生活に直結したものである。したがって、人間理解をめざす学問領域では、文化の概念化に多様性がある。

文化人類学における文化の概念化とその変遷を概観した太田 (1994) の文献から、文化の定義を表1のように整理した。学術的に初めて文化を定義したイギリスの人類学者エドワード・タイラー (Edward Burnet Tylor, 1871) は、人間の行動上の違いは「人種」によるものではなく、後天的に習得された「文化」という考え方で説明を試みた。タイラーは、「文化、または、文明とは、広い民族史的観点からいえば、知識、信仰、道徳、法、習俗、その他人間が社会の一員として獲得したすべての能力と習性を含むひとつの複雑な全体」と定義し、文化を行動パターンと捉え、文化には優劣がありヨーロッパ文明社会を頂点とした文化の階層性を説明した。そして、「未開人」集団も後天的に文化を習得し、ヨーロッパ文明社会と同等の文化を十分に発達させることができるとした。

そののち、アメリカの人類学者フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1889) は、文化の定義を明

表1. 文化人類学における文化の定義と特徴

提唱者(提唱年)	文化の定義	特 徴
エドワード・タイラー (1871)	文化、または、文明とは、広い民族誌的観点からいえば、知識、信仰、道徳、法、習俗、その他人間が社会の一員として獲得したすべての能力と修正を含むひとつの複雑な全体のこと	①文化は社会の構成員によって後天的に獲得される ②文化は知識、信仰、道徳などの複雑な総体である ③文化は(ヨーロッパ文明)に等しく、(概念として)単数扱いされる
フランツ・ボアズ (1889)		①(概念として)文化は複数扱いされる ②世界中の文化は平等である ③文化は経験を秩序立てる
ルース・ベネディクト (1946)	(文明国が立脚しているところの諸前提としての文化)文化とは世界の諸社会が各々もっているいろいろなレンズのことであるから、そのレンズは各社会毎に異なり、社会の成員が暗黙のうちに自明のこととして認め、そのレンズを通して人々は自らの経験を秩序立てていく	①文化は社会のメンバーによって共有される ②文化は暗黙の了解である ③文化は(概念として)複数扱いをする ④行動を意味づける枠組みである
ジェームス・ビーコック (1986)	文化とは特定の集団のメンバーによって学習され共有された自明でかつきわめて影響力のある認識の仕方と規則の体系	①文化は社会の構成員によって学習される ②文化は(自明であるがゆえに)暗黙の了解事項である ③(特定集団は数多く存在するので)文化も(概念として)複数扱いされる ④文化は認識の仕方・規則の体系である

出典：太田好信。(1994). 文化. 浜本満, 浜本まり共編. 人類学のコンセンサス文化人類学入門, 1-20, より一部抜粋して作成

確にしていなが、「未開人」の現地調査から、それぞれの文化は等しく価値を認められるべきという文化相対主義を強調した。ボアズの考え方は、ルース・ベネディクト（Ruth Benedict, 1946）やジェームズ・ピーコック（James L. Peacock, 1986）によって、文化とは「特定の集団のメンバーによって、学習され共有された自明でかつきわめて影響力のある認識の仕方と規則の体系」と定義している。ボアズ以降の文化の定義の特徴は、文化を階層ではなく相対でとらえ、行動パターンのみでなく行動に意味が付与されることを含めていた。

このような文化の捉え方の多様性について、クローバーとクラックホーンが、261に及ぶ文化の定義や説明を整理（表2）、7つの定義と6つの説明に分類した（江村，2003）。

表2. A. L. KroeberとC. KluckhohnによるCultuteの定義と説明

タイプ	内 容	数
Definitions (定義)	A: Enumeratively descriptive	20
	B: Historical	22
	C: Normative	25
	D: Psychological	38
	E: Structural	9
	F: Genetic	40
	G: Incomplete Definitions	7
Statements (説明)	A: The Nature of Culture	22
	B: The Components of Culture	7
	C: Distinctive Properties of Culture	9
	D: Culture and Psychology	22
	E: Culture and Language	17
	F: Relation of Culture to society, Individuals, Environment, and Artifacts	23

出典：江村裕文（2003）. 文化の定義のための覚書－文化その1－, 112-123, の一部を抜粋し作成

隣接領域である文化社会学では、北川（1999）が、クラックホーンの文化の定義を「明示的・暗示的に存在する、行動に関する、または行動のためのパターンからなり、シンボルによって獲得され伝達されるもので、人間の集団の顕著な功績である。文化の本質的な中核は、伝統的

に継承されてきた観念や、とりわけそれに付与された価値からなっている」と和訳した。そのうえで、社会学的に文化を分析する視点を、シンボルの体系、意味の体系、価値の体系に整理し、文化の類型として、物質形態の有無により精神文化を「文化」とし、物質文化を「文明」とする類型、あるいは意味の性質により「明示的文化」と「匿名的文化」とする類型、さらに文化の受け入れられている社会成員の範囲により「普遍的文化」、「特殊的文化」、および「選択的文化」とする類型を提案した。さらに文化のとらえ方は、研究目的や方法によりこれからも考案され続け、多様性が増すと結論づけている。

心理学の分野では、ヴントが、環境と心を独立させ、機能的な心を研究する「生理心理学（実験心理学）」と文化的所産としての心を研究する「民族的心理学」の二つの心理学を提唱した（Cole, 1996）。石井（2010）は、心理学における文化の捉え方と研究方法を整理した。文化心理学における文化の捉え方は、適応体系と観念体系というふたつがあり、適応体系は、心と文化は切り離され、心が文化に適応していくために、文化は心に影響するという捉え方、観念体系は、文化は人間に内包され、あるいは人間を内包し、心と文化は双方向に影響し合うという捉え方である。また文化と心理に関する研究方法は、文化心理学的アプローチ、社会歴史的アプローチ、制度的アプローチの3タイプがあり、それぞれの文化の定義と特徴を表3に整理した。

桑山（2005）は人類学の立場から、文化の特徴と内容を「文化は学習される」、「文化は共有される」、「文化は理念と実践の双方からなる」、「文化は統合されている」、「文化は適応の手段である」、「文化は変化する」の6つとしている（表4）。以上のように、文化を研究対象とする学問分野は広がり、捉え方や定義も多様に発展してきた。

表3. 心理学における研究方法ごとの文化の定義と特徴

研究方法	文化の定義	特 徴
文化心理学的アプローチ	文化とは、歴史的に取捨選択され、累積してきた慣習、概念、イメージ、通念、それらの体系化された構造、さらにそれらに基づいて作られた人工物の総体	①文化とは様々な要素が体系化され構造化されている ②文化とは、体系化された構造に基づき人によって生成される
社会歴史的アプローチ	文化とは、複数の人々が何らかの人工物を介して協議し合う過程とその所産であるとし、通常それは世代間で改変されながら継承されるもの	①文化とは、複数の人々に共有され、生成される ②文化とは、継続し、継承される ③文化とは、変化する
制度的アプローチ	文化的な信念や行動傾向は、生態環境への適応戦略である	①文化とは、生態環境への適応をめざした信念であり、行動パターンである

出典：石黒弘明，亀田哲也，(2010)．文化実践，15-160，心の本質的社会性を問うより一部抜粋して作成

表4. 文化の特徴と内容

文化の特徴	内 容
①文化は学習される	民族間で男らしさ、女らしさなどに関して全く異なる気質が見られることから、これらは、文化によって後天的に作り上げられ、生み出されるものであり、従って文化は、学習された結果である
②文化は共有される	同一文化の成員は、文化を同じくする人間は、似たように考え行動するという意味で同質的である
③文化は理念と実践の双方からなる	文化の規則や規範（理念）は、人々の行動（実践）を制限するが、規則や規範と行動とは必ずしも一致しない
④文化は統合されている	文化は様々な要素から成立するが、それらは、相互に関連して1つの全体を形成している
⑤文化は適応の手段である	生物としての人間が生き延びるためには、自分が置かれた自然環境に適応しなければならない。人間の場合、学習され、世代間で踏襲される文化が、いわば個体と外界のクッションとして作用する
⑥文化は変化する	文化の変化には発明、革新、伝播という3つの契機がある。発明は無から有を生むこと、発明されたものは革新を経て覚知へ伝播する

出典：桑山敬己，(2005)．人類学のキーコンセプト 文化，山下晋司編，文化人類学入門 - 古典と現代をつなぐ20のモデル，208 - 219を一部抜粋して作成

2. わが国の看護における文化のとらえ方

1) 看護のテキストにみる文化看護

文化の記述のあったテキスト13冊（表5）を佐藤らの先行研究の記述内容の項目である「文化の定義」、「文化の構成要素」、「看護における文化」、「地域保健医療福祉における文化」に照らし分類した。文化の記述内容は、文化の定義に関することは5冊、文化の構成要素に関することは1冊（表6-1）、看護における文化に関することは13冊、地域保健医療福祉における文化に関することは5冊にみられた（表6-2）。

文化の定義に関する記述内容は、テキストごとに特徴はあったが、前述した桑山の文化の概念の6つの特徴（2005，桑山）を包含していた。

看護における文化は、基礎看護領域、地域看護領域、老年看護領域に記述されていた（表6-2）。記述内容は、佐藤ら（2005）の看護における文化について「看護の対象となる「個人」、

「家族」、「地域」あるいは「病気」、「健康」というものは、文化によって規定されるもの、あるいは文化そのものとして捉えて理解し、それを踏まえた看護ケアをすることが重要である」という結果と同様のものがあった。

佐藤らの先行文献（2005）にはみられなかった内容として、基礎看護領域では、「日本人は、文化的背景の異なる人々と接する機会が少なかったために、異文化を感性ではなく知識レベルで理解しようとする。（ID8）」と、我が国では文化を看護の中にとり入れるために、自文化を意識する必要性を記述していた。また、地域看護領域では、「家族のアセスメントと同時にその家族が暮らす地域の文化的価値観のアセスメントが重要になる。（ID24）」と、家族のアセスメントには、地域の文化的価値観のアセスメントの視点の重要性を記述していた。老年看護領域では、「人々の老いに対する意識は人々が

生きてきた時代や文化により変化している (ID29)」ので「現代の工業化社会のように生産者としての能力に重きが置かれる文化的価値観」では、高齢者の社会行動に影響を与え・・・ (ID28)」と、社会のまなざしが老いの価値観を形成すると記述していた。また、「高齢者は自

表5. 看護のテキスト一覧

テキスト番号	著者名	発行年	著書名	出版社
基礎看護領域	A	松本光子	看護学概論 看護とは・看護学とは[第5版]	ヌーヴェルヒロカワ
	B	田村やよひ	看護学基礎テキスト 第3巻 社会の中の看護	日本看護協会出版会
	C	ライダー島崎玲子・岡崎寿美子・小山敦代	看護学概論 第3版 看護追求へのアプローチ	医歯薬出版
地域看護領域 (在宅看護領域、家族看護領域を含む)	D	中西睦子・井伊久美子・平野かよ子	TACSシリーズ・10 実践 地域看護学	建帛社
	E	眞船拓子・杉本正子・丸山美知子・西田厚子	看護師教育のための地域看護概説－公衆衛生看護を含む地域の看護に取り組むために－	ヌーヴェルヒロカワ
	F	金川克子	最新 保健学講座1 公衆衛生看護学概論	メヂカルフレンド社
	G	宮崎美砂子・北山三津子・春山早苗・田村須賀子	最新 公衆衛生看護学 第2版 2013年版 各論2	日本看護協会出版会
	H	渡辺裕子	家族看護学を基盤とした在宅看護論 I 概論編 第2版	日本看護協会出版会
	I	石垣和子・上野まり	看護学テキスト Nice 在宅看護論 自分らしい生活の継続をめざして	南江堂
	J	山崎あけみ・原礼子	看護学NiCE 家族看護学 19の臨床場面と8つの実践例から考える	南江堂
K	鈴木和子・渡辺裕子	家族看護学 理論と実践 第4版	日本看護協会出版会	
老年看護領域	L	水谷信子・水野敏子・高山成子・高崎絹子 編	最新 老年看護学 改訂版	日本看護協会出版会
	M	正木 治恵・真田 弘美	老年看護学概論—看護学テキストNiCE	南江堂

表6-1. 看護のテキストにみる文化の記述内容

項目	看護領域*	種別番号	ID	記述の内容
文化の定義	基礎	B	1	文化には、衣食住などの物質的なものから、社会的関係や意思疎通の手段である言語や表情などがある。それらは、人間が自然環境に適応するために、各地で独自に形成され維持されるものである。文化は、歴史や社会の都合上、形づくられた約束事であり、普遍的なものでも客観的なものでもない“常識”であり、社会基盤が異なれば、異なる数だけ存在する。
		C	2	文化とは、ある集団で学習され、共有され、伝承されてきた価値観、信念、規範および生活習慣のことであり、これらがその集団の考え方や決定・行動にある一定のパターン化された方法となって表現される (マデリンM.レイニンガー,1995)。
	地域	I	3	文化とは人々に共有されている信念や価値体系のことであり、私たちの行動や認識を意識的・無意識的に枠付けるものである。
		J	4	文化とは、人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む (広辞苑,2007) 個人や家族が有する固有の信条・価値観の背景となるものである。人間の生活様式、行動様式、思考様式であり、そこで育った人にとって認識されにくいものである。
	老年	M	5	文化は生活様式のあらゆる側面であり、広範囲にわたり、人間の諸活動すべてを包含する。その時代を生きた人に共通する考えであるが、世代間や育った地域によって異なる。
構成要素	地域	J	6	ガイガーとデイヴィッドハイザーは、異文化アセスメントモデルの項目として、コミュニケーション、距離感、社会組織、時間感覚、環境に対する効力感、生物学的差異をあげていた。

*看護領域 基礎：基礎看護領域 地域：地域看護領域 老年：老年看護領域

表6-2. 看護のテキストにみる文化の記述内容

項目	看護領域*	種別番号	ID	記述の内容	
看護における文化	基礎	A	7	異なる文化は異なる方法のケアを知覚し、知り、実践する。しかし、ケアには世界中のあらゆる文化において一部共通するものがある。人間は個々のヒューマンケアをする文化的存在であり、環境は個人や文化的集団がそこにおいて生活する背景としてとらえている。	
		B	8	日本人は文化的背景の異なる人々と接する機会が少なかったために、異文化を感性ではなく知識レベルで理解しようとする。看護活動をする上で自分の背景を自覚し、根気強く相互理解に努めることである。	
		B	9	文化的背景の違いによって看護の質に格差が生じないために、レイニンガー (Leininger MM) は、「人々の文化的背景を理解することなくして、すべての対象者に公正で公平な看護を提供することはできない」と認識し、「文化を超えた看護」(transcultural nursing)、「民族看護」(ethnonursing)、「比較文化看護」(cross-cultural nursing)を提唱した。	
		B	10	アメリカでは、文化の研究が盛んにおこなわれており、看護教育においても基礎教育から大学院や卒業教育まで幅広くカリキュラムに組み込まれ、発展し、保健医療政策の策定にも貢献している。わが国はアメリカとは、国際社会における歴史のおよび文化的交流の背景が全く異なるため、日本独自の看護理論を構築することが求められている。	
		C	11	文化的ケアとは、文化に基づいて健康(安寧状態)を維持したり、人間の条件もしくは生活様式を高めたり、死や障害に向き合おうとする他者または集団を援助し、支持し、能力を与えるような行為をさす。(マデリンM.レイニンガー,1995)。	
		C	12	レイニンガーは、異なる環境や文化的状況におけるヒューマンケア、安寧、健康にかかわる看護の現象に着目し、実際の調査から、ヒューマンケアリングが人間の誕生、成長、病気からの回復、安寧の維持に欠かせないもので、どのような文化にも存在するとし、文化ケアを提唱し、サンライズモデルを考案した。	
		D	13	保健師は、人々を地域文化(個人を取り巻く外部の生活環境)に帰属意識をもち、そこで生きる価値観や生活習慣を育み、生活環境と相互に影響を与え合う関係の中で生活者としてアプローチする。	
		D	14	地域看護におけるコミュニティの要素とは、①コアとしての人口動態、文化、歴史など、②自然環境、③教育、④安全と輸送、⑤政治と行政、⑥保健と社会サービス、⑦コミュニケーション、⑧経済、⑨レクリエーションであり、文化をコアとして位置づけている。	
		D	15	保健師活動において対象となる住民のものの見方、考え方、それに基づく生活のしかたという地域住民の文化を知ることは非常に重要なことである。	
		E	16	地域看護活動の特徴は、対象となる地域の自然環境、これまで受け継がれてきた文化や歴史、人口構成の割合、主要な交通網、人々の生活を支える政治や経済、教育、そして医療保健福祉サービスの充実度などから、地域を1人の人間のように、統合された1つの単位(システム)としてアセスメントしていく必要がある。	
		F	17	宗教的な信条や地域の喫煙や飲酒に対する許容度の違いが家庭内での行動に影響することから、文化や価値観が健康に及ぼす影響は大きい。	
		F	18	日本の文化としての地域ケアに、健康と人権を取り入れるためには、対象のもつ保健ニーズの把握や事例検討だけでは不十分で、他者との対話の中で自分ごととして受け止める。	
	G	19	人々の保健行動、地域ケア体制などに影響を及ぼす地域の生活文化は簡単に変えられないが、看護活動を通して健康観や介護観を変化させるには、地域文化を問い直し、発展させることにより、住み遂げたい地域づくりにつながる。		
	I	20	在宅看護は、その個人が有する価値観やライフスタイルを尊重した看護を提供することであるが、それらは、地域社会から影響を受けるため、その文化を尊重した看護を提供すべきである。		
	J	21	文化的背景の違いは、生活のしかた、考え方、行動およびその意味に影響を与え、ガイガー(Giger)とデイヴィッドハイザー(Davidhizar)による異なる文化をもつ人々の間でも意味のある援助が成り立つための指針、異文化アセスメントモデルを紹介している。		
	J	22	ライトは、「病気に対する考え方は、社会的・文化的背景をもつ患者とその家族自身が、経験、信条、価値観に基づいて独自に生み出すもので、看護者が対象を理解する鍵」としている。		
	J	23	フリードマンは、少数民族的な視点と、フェミニストの視点から、看護者の文化を理解する姿勢と家族の捉え方について、家族資源、ライフスタイル、家族周期、家族機能、家族形成過程の多様化をあげている。		
	J	24	家族のアセスメントと同時にその家族が暮らす地域の文化的価値観のアセスメントが重要になる。		
	K	25	家族は、文化から影響を受け、また、その時代の文化を創る。特に歴史的な文化を背負って生きてきた高齢者のケアの場面では、看護者は、文化的背景にまつわる家族の問題に直面しやすい。		
	K	26	文化的背景の異なる国・地域の家族や家族看護を参考にしつつも、個人の文化的背景を中心に考察することが重要である。一方、文化の異なる国・地域の家族と比較することは、対象の特性や背景を浮き彫りにすることができる。		
	老年	L	27	個人に影響をあたえる要因として、「年齢成熟的要因」、「文化的・生育史的要因」、「個別的な要因」の3つをあげ、相対的強度について説明している。文化的生育的要因では、成年期にピークを迎え、加齢と共に下降する。	
		L	28	現代の工業化社会のように、生産者としての能力に重きが置かれる文化的価値観は、高齢者の社会行動に影響を与え、多くの高齢者は、勤労意欲があるにもかかわらず、就業の機会を阻まれている。	
		M	29	人々の老いに対する意識は、人々が生きて暮らしてきた時代や文化により変化している。	
		M	30	儒教的な敬老精神が今も日本文化の中に流れているが、日本語表現では、「老」を賛美するより、マイナスイメージとして用いられる言葉が多い。「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」(内閣府 平成15年)でも、回答者の7割が高齢者を経験や知恵が豊かであるプラスイメージより、健康不安などのマイナスイメージで捉え、言葉にみるわが国の伝統的な老いに対する価値観と一致している。	
		M	31	生活史や健康歴、その生きてきた社会や時代、特定の人々との関係は、文化や価値観として自然に身につく、高齢者の物事の判断や選択、これからの生き方に影響する。高齢者に共通の文化・価値観は存在するが、個別に異なる文化もある。	
		M	32	高齢者は、自文化や価値観に接することで、心癒されるので、現在の生活が自文化や価値観と一致していることが重要である。	
	地域保健医療福祉	基礎	B	33	人類の歴史は、民族移動による混血と、文化、医療、ケアなど環境に適応するための知恵を交流し発展させてきた。それが近代社会では、自決権を重視した国境により、文化や経済にも境界をつくり、文化の違いが政治問題とされるようになった。その解決には、文化、宗教、民族、性別の違いを受け入れられること、個々人の個々人のレベルでも自分と異なるものを理解することである。
			F	34	世界において、健康に悪い影響を及ぼす文化の例を紹介している。
		地域	G	35	離島には、歴史や独自の風土を育み、伝承されている地域があり、生活行動や生活習慣、健康問題への対応に影響している。
			H	36	地域には人々が長年にわたり代々受け継いできた老いや障害、死をめぐる地域の文化的風土があり、それは近隣の助け合いに影響する。
			J	37	日本人が移民により、日本文化の価値観を時間とともにどのように引き継いでいるかを紹介している。
			J	38	教育環境の異なる老親と老親を支える世代の経験した文化的価値の相違を紹介している。

*看護領域 基礎：基礎看護領域 地域：地域看護領域 老年：老年看護領域

文化や価値観に接することで心癒やされるので、現在の生活が自文化や価値観と一致していることが重要である。自文化や価値観は意識しづらいので言語化されにくいため、高齢者の文脈や行動場面から対象理解する姿勢が必要である。(ID32)」と、高齢者の生きている文化を、意識的に理解する必要性を記述していた。

地域保健医療福祉における文化については、佐藤ら(2005)の先行文献では、看護専門家以外の社会学や心理学、公衆衛生学のそれぞれの分野で取り扱われていた。しかし今回の記述は、基礎看護領域と地域看護領域にみられ、「・・・文化の違いが政治問題とされるようになった。その解決には、文化、宗教、民族、性別の違いを受け入れる・・・(ID33)」、「世界において、健康に悪い影響を及ぼす文化の例を紹介・・・(ID34)」、「日本人が移民により、日本文化の価値観を時間とともにどのように引き継いでいるかの紹介・・・(ID37)」など、グローバル化社会における健康問題への取り組みを世界レベルで記述していた。また、「離島には、歴史や独自の風土を育くみ・・・健康問題への対応に影響している。(ID35)」、「地域には・・・老いや障害、死をめぐる地域の文化的風土があり、それは近隣の助け合いに影響する。(ID36)」と、特定の地域の文化を意識したローカルな健康問題への取り組みも記述されていた。

2) 文化看護学会誌にみる文化看護

文化看護学会誌の21文献を「外国の文化に関すること」7文献と「日本の文化に関すること」14文献に大別し、記述内容から文化の捉え方を分類した(表7)。

外国の文化に関することでは、文化の捉え方は、「日本と外国を比較」と「外国出身者が日本文化に適応する過程」に分けられた。

日本と外国の比較は、「認知症の捉え方の違いにもとづく認知症ケア実践の日本と中国の比

較」があった(ID1)。外国出身者が日本文化に適応する過程は、「外国出身看護師が日本の医療現場で体験する人間関係や看護技術の文化的差異を獲得する工夫と適応」があった(ID4)。

日本の文化に関することでは、文化の捉え方は「個人の生活体験による認識と意味」、「家族の生活体験による認識と意味」、「地域の特徴による人とのつながり」、「歴史の生活への影響」、「看護職が異なる地域文化にふれる体験」、「組織の特徴による人とのつながり」に分けられた。

個人の生活体験による認識と意味は、例えば、糖尿病患者に自分の身体についてどのように思うか質問すると、身体変化を知識だけでなく、自ら体験した身近な病人の身体変化の記憶から自己の身体をとらえる「糖尿病患者の主観的な身体の捉え方に影響する生活体験と身近な病者の身体変化の記憶」があった(ID10)。

家族の生活体験による認識と意味は、終末期がん患者の家族の意思決定と家族介護に対する姿勢の“ゆれ”は、患者の希望や心情を理解し寄り添おうと思う反面、周囲から提供される情報で「こうすべき」という規範に惑わされてしまう、があった(ID14)。

地域の特徴による人とのつながりは、地域のつながりが農作業や冠婚葬祭の相互扶助的な「ゆい」によって支えられた地域が、「ゆい」の衰退により地域での人と人とのつながりによる助け合いが希薄化していることを懸念し、新たな組織づくりによるつながりをつむぐ、があった(ID16)。

歴史の生活への影響は、日本独自の睡眠援助方法となった足浴を洞察するために、看護学の教科書などから理論的背景や、関連する日本の習慣や歴史との関連を調べた「看護技術(足浴療法)について、歴史からその起源と生活習慣との関係を紐解き、日本独自の看護ケアを考察」があった(ID17)。

看護職が異なる地域文化にふれる体験は、沖

表7. 文化看護学会誌からみた文化の捉え方

ID	著者名	発行年	文献名	文化の捉え方に関する記述の要約	文化のとらえ方	
1	正木治恵, 張平平, 周宇とう他	2009	文化に根ざした認知症予防教室の開発過程における日中比較	認知症の捉え方の違いにもとづく認知症ケア実践の日本と中国の比較	日本と外国を比較	外国の文化に関すること
2	張平平, 正木治恵	2010	中国老年看護の発展に向けた一考察 日本老年看護の概観を通し	高齢者対策・制度と老年看護の提供体制を文化とした日本と中国の比較		
3	藤田水穂	2013	日本およびフィンランドの小学校教科書における人体や健康に関する教育の比較	子供に対する健康教育制度を文化とした日本とフィンランドの比較		
4	王麗華, 小林和成, 大野絢子	2010	外国出身看護師の医療現場における文化的対応に関する研究	外国出身看護師が日本の医療現場で体験する人間関係や看護技術の文化的差異を獲得する工夫と適応	外国出身者が日本文化に適応する過程	
5	飯田貴映子, 酒井郁子	2012	高齢者長期ケア施設における外国人看護職・介護職の就労の現状と課題	外国人看護職・介護職の就労の困難と可能性		
6	酒井郁子, 胡秀英	2012	四川大地震における災害後リハビリテーションと看護の課題	災害支援での他地域での支援と文化的コンピテンシーの必要性		
7	西田伸枝, 田所良之, 谷本真理子他	2013	在日コリアン高齢者1世における文化を尊重したデイサービスの意味	日本に移住した在日コリアン同士のデイサービス利用時における自国の習慣再現とその意味		
8	石川麻衣, 宮崎美砂子	2009	自主グループ参加者のライフストーリーからみた健康づくりのテーマ	健康づくり体験の意味の類似性と多様性から対象を理解	個人の生活体験による認識と意味	
9	宇野澤輝美枝	2013	重度身体障害をもちながら生きてきた人のライフストーリー	重度障害をもちながら生活する主観的体験の理解によるエンパワメント		
10	高橋良幸, 張平平, 清水安子他	2010	日本における糖尿病予防に取り組む人々の身体の捉え方とその文化的考察	糖尿病患者の主観的な身体の捉え方に影響する生活体験と身近な病者の身体変化の記憶		
11	杉本洋	2011	表現する生存者の戦術的実践 経験の深化と「正常」と「異常」の再構成	精神障害を抱える患者の表現活動から捉えた主観的な病気体験の理解		
12	酒井郁子, 湯浅美千代, 島田広美他	2010	脳卒中患者の自我発達を促進する看護援助理論を用いた看護師学習プログラムの開発と評価	看護職経験後の看護理論の学びなおしが実践との照合により専門職アイデンティティの確立に与える影響		
13	遠藤和子, 正木治恵	2011	食卓の営みの語りに表れた2型糖尿病とともにある中高年女性のありよう	食卓の営みに表現される女性の生活経験と病気体験の関係	家族の生活体験による認識と意味	日本の文化に関すること
14	櫻井智穂子, 眞嶋朋子	2013	終末期の緩和を目的とした療養への移行におけるがん患者の家族の決断のゆれに関する研究	終末期の療養環境に関する家族の意志決定に影響する地域の規範と家族のずれ		
15	井出成美, 佐藤紀子, 山田洋子他	2009	社会的サポートネットワークの構築につながる高齢者のエンパワメント指標の試案	地域にある人間関係を活用した住民エンパワメント	地域の特徴による人とのつながり	
16	武分祥子, 柄澤邦江, 岩崎みすず他	2010	地域ケアにおける人々のつながりに関する研究 飯田市郊外の住民が語った「結い」の実態をもとに	地域の人間関係がつくる相互扶助的サポートネットワークの変化		
17	吉永亜子, 吉本照子, 石垣和子	2009	睡眠を促す日本の看護技術としての足浴 足浴利用法の変化	看護技術(足浴療法)について、歴史からその起源と生活習慣との関係を紐解き、日本独自の看護ケアを考察	歴史の生活への影響	
18	川上裕子	2012	国民健康保険組合の設立と保健婦活動の展開 千葉県社会保健婦養成所卒業生の履歴から	保健師養成の歴史(地元の女子を対象)が生んだ地域の生活に密着した保健活動		
19	大川嶺子	2011	小規模離島A島における高齢者地域ケアシステム構築を目指した住民活動の支援 住民活動の進展に影響を与えていた社会文化的要因の検討	地域ケアシステム構築支援における地域の伝統的な意思決定システムの理解	看護職が異なる地域文化にふれる体験	
20	知念久美子, 野村幸子, 盛島幸子他	2011	沖縄における地域文化的看護体験	異なる地域文化をもつ看護職の文化看護体験		
21	眞嶋朋子, 楠潤子, 渡邊美和, 他	2012	専門看護師が必要とする看護管理者からの支援 組織文化からの一考察	専門看護師が組織横断的に役割を発揮するための看護管理者との連携と組織風土、および人間関係	組織の特徴による人とのつながり	

縄で看護経験を持つ看護職が、患者がユタを精神的拠り所に行っていることや特殊な民間療法を受けているなどの事実を体験する、があった(ID20)。

組織の特徴による人とのつながりは、専門看護師に役割遂行をさせるために看護管理者が、モチベーションへの支援や伝統的な縦割り組織で専門看護師が役割を遂行できるよう、組織で横断的に関わられる職位につけ支援をする、があった(ID21)。

3. 高齢者ケアにおける文化看護の研究

高齢者ケアにおける文化看護を、文化看護学会誌の掲載文献から検討すると7項目であった(表8)。その分類で国内外の文献を整理すると、国内文献は「地域の持つ文化」、「文化の比較」がそれぞれ15件(24.6%)、「移民の文化」3件(4.9%)であった。それに対し、国外文献は「移民の文化」が25件(29.4%)と最も多く、「家族の持つ文化」が0件であった。

国内外の研究を概観すると、「個人のもつ文化」には、当事者としての要介護高齢者や健康障害をもった高齢者の生活の実態やケア、レイニンガーの看護理論の有用性などがあった。「家族の持つ文化」には、高齢者の健康の変化(終末期、認知症など)に対する家族や介護者の体験や認識、家族のきずなや家族間の文化の伝承などがあった。「地域のもつ文化」には、地域

の文化に影響される高齢者の健康やケア、看護師が体験した地域文化的看護体験があった。「移民の文化」には、移民を対象とした高齢者の健康の実態とケアがあった。「組織・専門職文化」には、病院や施設におけるケアの文化、看護師、介護支援専門員など専門家の高齢者やケアに対する意識などがあった。「文化の比較」には、民族や国単位の健康の比較、在日の外国人における文化の健康やケアへの影響などがあった。「文化の教育研究方法」には、文化的能力を育てる教育方法・カリキュラムの開発などの教育、高齢者の健康をナラティブアプローチやエスノグラフィー等を用いて明らかにする質的研究などがあった。

以下、項目ごとの文献例を紹介する。

1) 「個人のもつ文化」

国内の例として、障害をもつ当事者の地域生活を支える看護への示唆を得ることを目的とした文献(宇野沢, 2013)は、重度身体障害を持つ高齢期の女性を対象とし、重度身体障害を持ちながら生活している人の体験を当事者の語りからライフストーリー研究の方法を用いて分析していた。当事者の体験の行動パターンと語りによる意味を付与するとし、個人のもつ文化として捉えていた。

国外の例として、レイニンガー理論を適用して高齢者の日常的ケアを分析することを目的とした文献(Souza NM, 2012)は、II型糖尿病を持つ高齢者を対象に、半構成的面接を実施し、内容分析とcontemplated pre-analysisで分析していた。レイニンガー理論から導かれたカテゴリーにより、II型糖尿病を持つ高齢者の日常ケアを、個人のもつ文化として捉えていた。

2) 「家族の持つ文化」

国内の例として、家族の文化の違いを探り、家庭内において健康行動に影響を及ぼし得る文

表8. 高齢者ケアにおける文化看護の研究

	国内文献(%)	国外文献(%)
個人のもつ文化	7 (11.5)	16 (18.8)
家族の持つ文化	7 (11.5)	0 (0.0)
地域の持つ文化	15 (24.6)	16 (18.8)
移民の文化	3 (4.9)	25 (29.4)
組織・専門職文化	7 (11.5)	8 (9.4)
文化の比較	15 (24.6)	7 (8.2)
文化の教育研究方法	7 (11.5)	13 (15.3)
計	61 (100.0)	85 (100.0)

化がどのように伝承されているか検討することを目的とした文献(深澤, 2005)は、三世代(祖母・母・娘)を対象とし、インタビュー法を用い、データから各世代間の文化と思われる内容を分類し分析していた。3世代家族間において家庭内文化を伝承する、家族の持つ文化として捉えていた。

3) 「地域の持つ文化」

国内の例として、看護職の地域文化的看護体験と沖縄の地域文化の関係の検討を目的とした文献(知念ら, 2011)は、沖縄で看護経験のある看護師を対象に、沖縄で暮らす患者・家族・住民とのかかわりの中で認識した地域文化的看護体験について聞き取り、データを分類整理し、その結果を沖縄の地域文化との関連において検討していた。沖縄での看護の地域文化的な特徴を、地域の持つ文化として捉えていた。

国外の例として、ファミリーヘルスチームのコミュニケーションの有効性を評価することを目的とした文献(Tereza, 2013)は、ケアの受手である高齢者を対象にインタビューを実施し、質的に分析していた。高齢者とケア提供者のコミュニケーションに影響する要因として、地域の持つ文化を捉えていた。

4) 「移民の文化」

国内の例として、ブラジル日系永住者の地域における健康づくりの担い手としての役割と日系コロニアにおける健康に関する支援のあり方を明らかにすることを目的とした文献(佐藤ら, 2012)は、コロニアのリーダーを対象に、半構成的面接を実施し、エスノグラフィーを用いて質的帰納的に分析していた。健康づくりにおいて移民として異文化のなかで自文化と照らして検討し、移民の文化として捉えていた。

国外の例として、英語を話さない認知症高齢者をナーシングホームに入所させた介護者(親

戚)の体験を明らかにすることを目的とした文献(Kong E, 2006)は、家庭での介護者を対象としてインタビューを行い、内容分析を行っていた。韓国人の物事の考え方と認知症のとらえ方を、認知症ケア提供における韓国人特有の基本的文化モデルとし、移民の文化として捉えていた。

5) 「組織・専門職文化」

国内の例として、療養病棟における高齢者と看護師の入浴援助場面の構造を明らかにすることを目的とした文献(坂井ら, 2008)は、療養病棟の経験の長い看護師と長期入院している高齢者を対象とし、看護師による高齢者の入浴援助場面を参与観察と当事者インタビューを行い、KJ法で分析していた。療養病棟の文化の影響をうける看護師と高齢者を、組織文化として捉えていた。

国外の例として、看護師不足の原因を明らかにすることを目的とした文献(McNeese-Smith, 2001)は、看護師を対象に離職に影響する要因を調査し、内容分析で分析していた。組織として離職に関与している要因を組織文化として捉えていた。

6) 「文化の比較」

国内の例として、日本と中国の看護の相違点の認識を調査することを目的とした文献(安部, 2010)は、日本で看護研修経験のある中国人看護師を対象とし、中国の看護理解と異文化看護分析に(数量化)検定を用いる方法であった。国単位の異文化看護を理解する、比較文化として捉えられた。

国外の例として、糖尿病を持つアメリカ原住民の、足の潰瘍を治癒させる生物医学的および伝統的方法についての認識を明らかにする目的の文献(De Vera, Noemi, 2003)は、アメリカ原住民を対象に、エスノグラフィックな方法を

用いてデータを収集し、レイニンガーのサンライズモデルを枠組みとして分析していた。自国内に居住する原住民の文化を理解する、比較文化として捉えていた。

7) 「文化の教育研究方法」

国内の例として、糖尿病治療を中断し通院再開する時、それに至るまでにどのような体験をしているかを明らかにすることを目的とした文献（藤田ら、2013）は、Ⅱ型糖尿病患者を対象とし、エスノグラフィーの手法を方法としていた。治療の中断から再開までの体験を文脈として理解する、文化の研究手法として捉えた。

国外の例として、文化に配慮したケアの評価ツールを導入することを目的とした文献（Jeffreys, R, 2013）は、看護学生を対象に、一つの評価ツールで文化的能力を測定していた。看護実習における教員と学生の学びの共有を、文化の教育方法と捉えていた。

IV. 考察

1. 教育からみた文化看護

文化という概念は、人間理解をめざす学問領域で多様性を持ち、人間を対象とする看護領域でも国内外で「文化看護」、「cultural nursing」、「cultural care」として取り入れられていた。

看護基礎教育における文化看護は、理論書で1980年代、看護のテキストでは、1990年代に地域看護領域、2000年代に基礎看護領域、老年看護領域では、2010年代に記述がみられた。このように看護基礎教育では、文化看護を取り扱う領域の拡がりが見える。その記述内容は、先行研究では、看護の対象が文化によって規定されるものであり、文化を踏まえた看護ケアの重要性を記述していた。今回の結果では、文化看護を先進させ、単一民族であるが故に異文化に触れる機会が少ない日本人の特徴から自文化を意識する必要性、家族のアセスメント項目に文化

的価値観の追加する提案、社会のまなざしと老いの価値観の関係、健康問題の取り組みは、グローバルな視点とローカルな視点で文化を意識することを記述していた。

フォロンド（Cynthia L. Foronda, 2008）は、対象理解のための文化的感受性の概念分析を行い、文化的感受性の前提として個人は互いに違いdiversity（多様性）があること、多様な異文化とのencounter（出会い）があること、自文化との相違をawareness（認識）することを導いている。わが国の看護基礎教育では、自文化と異文化を意識するために、自文化への文化的感受性を高める教育が必要である。

また、社会のまなざしが老いの価値観を形成することから、世界に類をみない超高齢社会に向かうわが国は、高齢者先進国としての役割がある。それは高齢者個人の持つ文化、高齢者の家族の持つ文化、高齢者が生きてきた地域の持つ文化や現役時代の組織文化に関心を寄せ、今そこに存在する高齢者のアセスメントに生かす教育が求められていると考える。さらに、桑山（2005）は、近年のグローバリゼーション化により、これまで明確に区切られた特定の場所で隔離、発展してきた文化が互いに共有されることで、新しい文化観の構築が課題となっていると述べている。このように高齢者ケアにおける文化看護の教育には、個々の高齢者の持つ文化という虫の目（ローカルな視点）と人間として老いのもたらず文化という鳥の目（グローバルな視点）の必要性を示唆していた。

2. 研究からみた文化看護

文化看護学会の目的は、世界各地に生きる人々がもつ文化の多様性、普遍性を探求することを挙げていたが、文化看護学会誌からみた文化看護の研究は、外国とわが国との国際比較よりもわが国の個人や家族、地域や組織の持つ文化の特徴について多く取り上げられていた。特

に、個人や家族の生活体験や看護職が異なる地域文化にふれる体験というように体験に意味をのせて文化を紐解き、対象の持つ異文化と看護職の持つ自文化の相違を認識し対象理解につなげていた。また、特定の地域を取り上げ、歴史的な生活習慣や人とのつながりの理解から看護ケアを組み立てる研究が行われていた。つまり価値観や規範の異なる人間として異文化を受け入れる研究が行われているといえる。

高齢者ケアにおいては、国内と国外の文献で差異がみられた。国内文献は「地域の持つ文化」、国外文献では「個人の持つ文化」に関心が高く、また国外文献では「家族の持つ文化」が皆無であった。北山 (1998) は、他者との関係において欧米人は個人主義で独立的自己観を持ち、東洋人は自己と他者の境界が曖昧で相互協調的自己観を持つと述べている。家族や地域より個人の価値を優先する国外と、家族や地域の価値と照らし合わせ折り合いをつけるわが国との差異が研究の関心テーマや対象にも影響していると考えられた。

また、文化の教育や研究方法についての研究が国内外で行われていることは、高齢者ケアにおける文化看護の発展が期待できる。

V. おわりに

社会のまなざしが老いの価値観を形成することは、わが国の社会保障制度改革にも影響している。「安心と希望の介護ビジョン」(厚生労働省, 2008) では、高齢者をケアの受け手としてではなくケアの提供者として地域づくりに貢献できる人材としても位置づけている。野口 (2008) は、「地域文化のもとで生活する対象に、その文化に適したケアを開発し、提供することは看護専門職者の義務であるが、その当たり前のことが追求されずにきている」と述べ、文化に根ざした看護の実践・教育・研究に期待を寄せている。大湾 (2011) は、看護職者には、高

齢者が能力や経験を発揮できるように支援し、高齢者が「求めていること」と「できること」をつなぐこと、つまり、高齢者が地域に生かされ地域を生かすという相互に作用しあう地域づくり(生かし生かされる地域づくり)が必要であると述べている。生かし生かされる地域づくりとしての高齢者ケアは、当事者のもつストレングスに着目することであり、高齢者のストレングスとは、「地域文化を生きている」ことであると考える。

その地域に長く生活してきた高齢者は、地域のスペシャリストであり、文化に適したケアを開発するために、そのストレングスを発揮できる主体である。主体としての高齢者のストレングスは、要介護状態になっても変わらない。だとするならば、我が国が超高齢社会に対応するための高齢者ケアの方向性として推し進められている地域包括ケアシステム構築は、要介護高齢者を中心に据えて、地域の人々との協働連携によって、地域文化を中心に据えた地域づくりといえよう。

引用文献

- 安部由紀, 西村正子, 前田迪郎. (2010). 中国人看護師が感じた日中看護の相違点 中国の看護理解と異文化看護, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 6, 91-100.
- 文化看護学会. (2007). 文化看護学会設立趣意書.
<http://scns.kenkyuukai.jp/special/?id=5082>
 (2014年9月29日現在)
- Cole, M. (1996/2002). 天野清 (訳), 文化心理学 発達・認知・活動への文化—歴史的アプローチ (初版), 135-160, 新曜社, 東京.
- Cynthia L. Foronda. (2008). A Concept Analysis of Cultural Sensitivity. *Journal of Transcultural nursing*, 19(3), 207-212.
- 千葉大学大学院看護学研究科. (2008). 千葉大

- 学21世紀COEプログラム日本文化型看護学の創出・国際発信拠点－実践知に基づく看護学の確立と展開－, 1-2.
- 知念久美子, 野村幸子, 盛島幸子, 美底恭子, 糸数仁美. (2011). 沖縄における地域文化的看護体験, 文化看護学会誌, 3(1), 30-37.
- De Vera, Noemi.(2003). Perspectives on healing foot ulcers by Yaquis with diabetes, *Journal of Transcultural Nursing*, 14 (1), 39-47.
- 江村裕文. (2003). 文化の定義のための覚書－文化その1－, 112-123, 異文化, 法政大学国際文化学部企画広報委員会, <http://hdl.handle.net/10114/299> (2014年9月29日現在).
- 藤田結香里, 稲垣美智子, 多崎恵子. (2013). 通院中断した2型糖尿病患者の通院再開に至るまでの体験, 日本糖尿病教育・看護学会誌17(1), 13-20.
- 深澤圭子. (2005). 健康行動に関わる家庭内文化の伝承 祖母・母・娘三世代への聞き取りから, 札幌医科大学保健医療学部紀要, 8, 93-97.
- 石井敬子. (2010). 文化と認知－文化心理学的アプローチ, 石黒弘明, 亀田哲也(編), 文化と実践 心の本質的社会性を問う(初版), 63-160, 新曜社, 東京
- Jeffreys, Marianne R, Dogan, Enis.(2013). Evaluating Cultural Competence in the Clinical Practicum, *Nursing Education Perspectives*, 34(2), 88-94.
- 北川紀男. (1999). 文化社会学研究 現代文化の理解にむけて(第1版), 1-50, 八千代出版株式会社, 東京.
- 北山忍. (1998). 自己と感情－文化心理学による問いかけ－(初版), 共立出版株式会社, 東京.
- 桑山敬己. (2005). 人類学のキーコンセプト文化, 山下晋司編. 文化人類学入門－古典と現代をつなぐ20のモデル(初版), 208-219, 株式会社弘文堂, 東京.
- 厚生労働省. (2008). 安心と希望の介護ビジョン. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/11/dl/s1121-8a.pdf> (2014年9月29日現在).
- 厚生労働省(2013). 地域包括ケアシステム http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/ch-iiki-houkatsu (2014年9月29日現在)
- 古在豊樹. (2009). 「農」と「市民」を基盤とした文化・学術, 文化看護学会誌, 1(1), 52-59.
- Kong E.(2006). The lived experiences of Korean immigrant caregivers after nursing home placement of their non-English-language speaking (NELS) elderly relatives with dementia, University of Pennsylvania, Ph.D, 178.
- 松林公蔵. (2007). 後期高齢者の地域健康管理の課題②国際的観点から－特にアジアの点描－, ジェロントロジーニューホライズン, 19(1), 31-35.
- McNeese-Smith, Donna K.(2001). A nursing shortage: Building organizational commitment among nurses / Practitioner application, *Journal of Healthcare Management*, 46 (3), 173-87.
- M. M. Leininger. (1991/1995). 稲岡文昭(監訳). レイニンガー看護論文化ケアの多様性と普遍性(第1版), 1-74, 医学書院, 東京.
- 野口美和子. (2008). 退官記念誌沖縄県立看護大学への軌跡－沖縄県立看護大学設置の趣旨に沿った取組から－, 文化に根ざした看護の実践・教育・研究, 84-90, 沖縄県立看護大学, 沖縄.
- 野口美和子, 大湾明美. (2011). 沖縄から漕ぎ

- だす「島しょ保健看護学」の船出 第1回
「島しょ保健看護学」の確立の必要性, 看護
教育, 52(11), 942-947.
- 大湾明美. (2011). 高齢者が安全で安心して希
望をもって暮らせる地域, 正木治恵・真田
弘美編, 看護学テキストNiCE老年看護学
概論, 280-287, 南江堂, 東京
- 太田好信. (1994). 文化, 浜本満, 浜本まりこ共
編, 人類学のコモンセンス文化人類学入門
(第1版), 1-20, 学術図書出版社, 東京.
- 坂井さゆり, 田所良之, 清水安子, 正木治恵.
(2008).
療養病棟における高齢者と看護師の入浴援
助場面の構造 ケアリング実践に影響する
療養病棟文化・環境の考察, 千葉看護学会
会誌, 14(1), 62-70.
- 佐藤紀子, 井出成美, 宮崎美砂子(2005). 地域健
康支援における文化に関する文献検討, 千
葉看護学会会誌, 11(1), 79-86.
- 佐藤美樹, 田高悦子, 臺有桂, 今松友紀, 田口
理恵, 河原智江, 糸井和佳, 根本明宜, 水
嶋春朔, 森口エミリオ秀幸. (2012). ブラジ
ル日系永住者の地域における健康づくりの
担い手が有する資質と役割の記述的研究,
横浜看護学雑誌, 5(1), 55-62.
- 下地敏洋. (2007). 高齢者の地域文化行動が幸福
感に及ぼす影響に関する研究—宮古島出身
者の地域文化行動を通して—, 沖縄県立看
護大学大学院博士学位論文.
- Souza NM, Honorato SM, Xavier AT, Pereira
FG, de Ataíde MB. (2012). World-view,
cultural care and environmental concept:
the daily care of the elderly with
diabetes mellitus [Portuguese], Rev
Gaucha Enferm. Mar, 33(1), 139-46.
- Tereza de Almeida, Rita, Itsuko Ciosak,
Suely.(2013). Communication between
the elderly person and the Family Health
Team: is there integrality?, Revista
Latino-Americana de Enfermagem, 21
(4): 884-90.
- 宇野澤輝美枝. (2013). 重度身体障害をもちなが
ら生きてきた人のライフストーリー, 文化
看護学会誌, 5(1), 1-11.

Cultural Nursing in Elderly Care

Sayuri Kurechi¹, Akemi Ohwan², Yuki Taba²,
Mineko Okawa², Hatsuyo Yamaguchi², Masayoshi Sakugawa²

Abstract

Objective : From the standpoint that the elderly live within a local culture, this article aims to elucidate the current state of cultural nursing in elderly care by examining the literature on culture. In this way, a conceptual overview of culture is provided and aspects of nursing culture in Japan are organized to examine how education and research regarding nursing culture in elderly care are being conducted.

Methods : From dissertations mainly on cultural anthropology (2006-2013), textbooks on the fundamentals of nursing education (2006-2013), articles from the *Journal of Cultural Nursing Studies* (2009-2013), and domestic and international articles (1989-2013), literature including the keywords “culture/cultural,” “nursing,” and “elderly,” in its title or abstract was extracted and classified.

Results : The concept of culture is diverse in the academic fields that strive to understand human beings. As nursing is a discipline that entails caring for humans, the concept of culture has been incorporated into domestic and international studies. Thirteen nursing textbooks covered culture of nursing in Japan, including topics such as the need to be aware of one’s own culture and the culture of the elderly and efforts pertaining to global and local health issues. Twenty-one articles from the *Journal of Cultural Nursing Studies*, which publishes studies on culture, covered Japanese and foreign cultures. Japanese culture captured by these articles can be divided into the following six categories: “meaning and awareness based on personal experiences of daily life,” “meaning and awareness based on experiences of family life,” “interpersonal relationships characteristic of local culture,” “historical influences on daily life,” “experience of interacting with a different local culture through a nursing job”, and “interpersonal relationships characteristic of organizations.” Sixty-one domestic studies on cultural nursing in elderly care in Japan covered “regional culture” and “cultural comparison,” and many of the 85 international studies covered “immigrant culture.”

Discussion : These results suggest, in cultural nursing education, the need for awareness of one’s own culture in order to achieve cross-cultural understanding, as well as the need for a bird’s eye view (global perspective) of culture attributed to aging and a “bug’s eye” view (local perspective) of the culture of elderly individuals. In domestic and international studies on cultural nursing in elderly care, differences may be attributed to sense of self, and this sense of self may play a role in the topics of research interest and in what research targets are selected.

Keywords : cultural nursing, local culture, elderly care

¹ Doctoral Course, Okinawa Prefectural College of Nursing

² Okinawa Prefectural College of Nursing